専門家会議

2022 年 2 月 10 日（木）

オンライン開催

2022 年 2 月 10 日（木）　専門家会議

趣旨

　国内外の日本美術担当学芸員及び関連部署の博物館職員が業務上で直面する問題などについて問題提起と討論、情報交換を行った。今回から、アジア・オセアニア地域の博物館に所属する専門家も新たにメンバーに加わった。

会場：オンライン開催
議長：松嶋 雅人　東京国立博物館
進行：鬼頭 智美　東京国立博物館

出席者

北米：14 名、欧州：15 名、アジア・オセアニア：3 名、日本：15 名

会議概要

　昨年度に引き続き、ウェブ会議システムを使ってリモート会議を行った。時差がある中で世界各地をつなぐ会議となったため､会議時間は短時間であったが､コロナ禍で直接的な交流が難しい中、貴重な情報交換、ネットワーク作りの場となった。

　会議では、下記２議題について各３分程度の問題提起の発表があり、続いて討議・情報交換が行われた。

議案１．日本美術用語のデジタル化について
ウィブケ・シュラーペ（ハンブルク美術工芸博物館）

問題提起

　シソーラス（語彙集）はデータベースの横断検索や言語横断検索にとって重要だが、ヨーロッパの博物館・美術館で導入されているシソーラスのシステムそのものがヨーロッパ中心主義的であり、時に人種差別的であり、専門家の観点からは受け入れがたい場合がある。一例として、ある宗教美術の図像データベースは、キリスト教とその他の宗教で分類しており、ヒンズー教、仏教、ジャイナ教の区別や、描かれている特定の神の名前を登録することができない。また、日本美術作品を分類する際に適した語彙がなく、異なる名前で登録され、後にそれを修正することに大変な議論と時間が必要になる状況も生まれている。

　国立図書館が共同でウェブポータルを立ち上げたり、中国美術の分野では共同の画像シソーラスを作成したりすることが行われているが､日本美術に適した図像学に関するシソーラスの使用、開発を行っている博物館・美術館はあるか、また日本美術用語のシソーラスのデジタル化をどのように改善できるのか議論をしたい。

討議内容

・東京国立博物館は、英訳作業の効率化、外国人来館者の満足度向上、専門家ではない一般の来館者にわかりやすい翻訳とすることを目指し、和英翻訳ガイドを作成している。

・海外の各館でも日本美術用語の翻訳リストを作成していることから、それぞれのリストの共有や情報交換をすることは有意義と考えられる。
・デジタル化に際して、西洋以外の地域の美術品の適切なカテゴリー分けが重要である。
・中国・韓国の博物館では、北米・欧州の館とは日本美術用語の翻訳に関する状況は異なるものの、翻訳を行う上で迷う場合もあり、リストの共有には関心がある。

議案２．貸借を伴う展覧会へのアプローチの変容
ジーニー・剱持（ポートランド美術館）

問題提起

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、展覧会が中止、延期となり、輸送コストもあがっている。そのような状況を受け、貸借を伴う展覧会へのアプローチをどのように変えていけばよいのだろうか。一つの選択肢は、クーリエについてである。実際に作品を展示する場合、貸借に帯同するクーリエに関する支出はかなり高額である。コロナ禍で移動が制限される中、賛否両論があるものの「バーチャルクーリエ」が取り入れられるようになった。その他、展覧会の出陳数を減らす、プライベートコレクションの割合を増やして借用元を減らす、地域の機関と連携するなど展覧会内容について考え方の変化があり、これにより費用を削減し、急な展覧会の中止・延期などにも対応できるようにしている。どのような方策をとるにせよ、人間関係が非常に重要である。それぞれの館において、コロナ以降どのような方策が取られ、展覧会内容にどのような変化が起きたか情報交換を行いたい。

討議内容

・バーチャルクーリエのみで貸借を承認する場合があるが、利点も欠点もある。コロナ禍であっても貸借できる、費用を抑えられるのは利点であるが、作品によっては展示作業や微妙な調整に非常に時間がかかり、実際に人を派遣した方が作業は容易である。また、バーチャルクーリエの場合カメラの操作など、マンパワーが必要になる。
・バーチャルクーリエを実施するためには、貸借を行う館同士の信頼関係、透明性が不可欠である。
・自館の所蔵品について見直すことは必要だが、それらの作品を活用するためには、修理や研究のために改めて費用や時間がかかる場合がある。
・コロナの影響で渡航や輸送の状況が不確かであることを考えると、今後は地域の中で協力者を増やすことになると考えられる。そのような新しい関係を構築する機会となったともいえる。

短い時間ではあったが、1 月 29 日の国際シンポジウムと合わせて大変意義のある会議となった。なお、正式な会議の終了後、約 30 分間会議を継続し、対面での交流が難しい状況で、専門家同士での自由な意見交換の場を提供した。